

釣りは物心ついた時から...

生まれは西区舞阪町弁天島で、実家は釣り宿を経営していました。ですから、周りは漁師や釣り師、遊魚船を営む人など、魚に関係する人ばかり。両親は釣り宿の経営で忙しく、ほったらかしにされていました。だから、幼少期は、目の前にある浜名湖で、釣りや砂遊びをして遊んでばかりだったので、釣りは物心ついた時からやっていました。



ところが、親父は釣り宿の経営を通して、水産業の生活の不安定さが分かっているから、釣りに関係することには反対でした。買った釣り竿を折られたこともあります。

でも、親に反対されると、逆にやりたくなってしまい、釣りはやめませんでした。釣りは周りの漁師に教えてもらいました。ある意味で英才教育ですね(笑)。

その後、中学に入ってから音楽に目覚め、つま恋のポップコン(ポピュラーミュージックコンテスト)にエントリーしていました。当初は、バンドをやっていた友人の手伝いで始めたのですが、はまってしまったんですよ。現在、メガバスが販売しているDVDの音源は、ほとんどすべて自分が作っています。

高校では、弓道にはまったのですが、悪さも覚えました。バイク、そしてロックに目覚めました。暴れたい、目立ちたいという気持ちがあったのかもしれませんが。

そして、高校3年生のとき、引かれた線路には乗りたくないという反骨心から、学校と親との3者面談の日に、バス釣りに出かけてしまったんですよ。そして、そのまま4日間野宿をしました。突然行方不明になったものだから、警察沙汰になって大騒ぎでした。

それから、浜松を離れてみたくなって、ギター1本を持って東京へ向かいました。

「人と人との出会い」の大切さ

東京では、ライブハウスを回りオーディションを受けていました。途中、住むところを確保するため、寮の完備されていた会社に入社しましたが、20歳の時に音楽事務所のオーディションに合格し退社しました。

ところが、所属事務所が摘発を受け倒産してしまったため、趣味の釣りを生かして自分で釣り道具屋をやろうと思ったのですが、先立つお金がなかったものですから、荒川の鉛屋で給料をもらわない代わりに、残った鉛のカスを使って鋳型を作らせてもらい、ルアーを作り始めました。

作ったルアーは、評価はされましたがまったく売れなかったですね。当時のルアーは、9割が輸入品。日本製は3流扱いだから、釣り道具店に持っていっても相手にされなかつ

たんです。

それなら、フィールドで火をつけたほうが早いということで、時折、霞ヶ浦の貸し舟屋で寝泊りしながら、自分の作ったルアーで釣りをして、その成果を東スポ（東京スポーツ新聞）に掲載してもらったんです。そうしたら、地元で騒いでくれるようになり、だんだん都内のプロショップからも連絡が来るようになりました。でも、ブレイクするまではいかなかったですね。

1986年にメガバスを設立したのですが、当時の日本では餌釣りが主流で、ルアーはおもちゃとして扱われ、「子供の釣り」と言われたこともありました。そして、日本はマーケットが小さかった。

そこで、21歳のとき、思い切ってアメリカへ飛びました。今度は、ギターと竿を持っていきました（笑）。テキサス州のダラス空港からレンタカーで、テーブルロックレイクへ。“湖の周りには釣り道具屋があるはずだ”という軽いノリでした。地図では15cmだったのですが、実際には1000km以上ありました。



現在の家屋

そして、試作で作ったルアーで桟橋で釣りをしていたら、船に乗せてやると声を掛けてくれたのが、現在、プロ・アングラーのランディー・

ブローキャットです。翌日、船に乗って釣りをやったら、自作のルアーを使った僕のほうがたくさん釣り上げ、ランディーがそのルアーをくれと言ってきました。

日本に帰ったのちに、ランディーが優勝賞金1000万円のメガバックストーナメントで優勝し新聞紙面を飾りました。そこから、日本でもだんだん噂になり始め、当時構えていた品川の工房にも問い合わせが来るようになりました。桟橋でのランディーとの出会いがなければ、今のメガバスはないかもしれません。神様に導かれたのかなと思いますね。

その後、生産が増えてきて、工場規模の拡大をする必要が出てきて、フィールドが近い琵琶湖周辺や愛知県一宮で物件を探していたのですが、母親の紹介でJR浜松駅南の美容院跡地を借り、1Fを店、2Fは工場にして販売を始めました。手が回らなくなってきたときに、お客さんにルアーの製作を手伝ってもらったこともあります。そんなお客さんが従業員になってくれたこともありました。「人と人との出会い」は、大切ですね。

その後は、規模の拡大とともに、中区小豆餅から東区有玉南、そして現在の東区西ヶ崎町へ移転してきました。

釣りの楽しさを伝えたい

「環境あつての釣り」だと思うので、環境保護には力を入れています。近場では、都田

ダムの植栽事業を行っています。全国的には日本釣り振興会と一緒に、ダイバーを雇って、ルアーの湖底回収に参加しています。今年は、琵琶湖と河口湖でやっています。

また、環境ダメージを少なくするため、成分解プラスチックを開発し、紫外線とバクテリアで分解できるルアーを開発しています。

環境ホルモンを出さない。最悪、人体に入っても悪影響を及ぼさないということで、取得が難しいアメリカのFDA（食品医薬品局）の認証を、メガバスの商品は釣り餌として世界で初めて取得しました。

さらに、ルアーの材料にリサイクル樹脂や天竜杉などの廃材を利用し、鉛などの有害物質を極力使わないようにしています。外国製ルアーは、釣れば良いというスペック至上主義で有害物質を含んでいることが多いですね。

また、売り上げの一部を在来種放流基金に寄付しています。自分がプロデュースした浜名湖フィッシングセンターでは、外来種のゾーニングをして、遊魚として楽しんでもらっています。

釣り人口は潜在人口1000万人とも言われていて、釣りに親しみたいと思っている女性は増えていると思います。女性はハマるとすごい。カップル、家族で釣りに行くことは、欧米では文化、ライフスタイルです。日本もそうなれば良いなと思います。

また、新規エントリー層の年齢は上がっていると思います。35~45歳くらいの人が、一通りいろいろな遊びをしてきた後に、家庭を持って週末釣りをやってみようというエントリーしています。釣りは、家族で楽しめるものだと思います。

水と親しむ手段としては、釣りは一番手ごろで簡単で分かりやすいと思います。しかし、敷居を上げ過ぎているというところがあり、釣り専門誌を見ても、何がなんだか分からない。今の業界発信のメディアは、ヘビーユーザーを相手にしているので、初心者はなかなかとつきにくいんですよ。

今後は、我々メーカーもメディアの機能を持って、発信していかななくてはいけないと考えていて、現在、新しいWEBサイトの立ち上げを構想中です。インターネットを使って、子供の頃に気軽にハゼやフナを釣ったように、間口を広くしたいですね。

コアユーザーの取り込みは出来ているんですよ。しかし、新規ユーザーの取り込みは、何か仕掛けないと難しい。そこで、新たなファン作りということで、ネット上でのトーナメントを考えています。釣った魚を写真に撮って、全国ランキングを付けるんです。

「メイド・イン・浜松」へのこだわり

世界を見渡しても、餌を使わない釣具メーカーの中で、ルアー、ロッド、リール、釣り系のライン、ウェアまで展開しているスポーツフィッシングの総合メーカーはメガバスだけだと思います。

ルアーだけやっても釣り人口は増えません。釣りはタフなスポーツです。有害な紫

外線を1日浴び、また、波は荒れてもフィールドに出なければいけないので、高いUVカット率と防水性がウェアに要求されます。スポーツフィッシングメーカー発のウェアが、アウトドアを楽しんでいる方にも受け入れられるかもしれません。そこから、釣りの魅力を知ってもらうことができれば、うれしいですね。

浜松は「ものづくりのまち」と言われているし、ベンチャー企業も多いですね。また、西は浜名湖、東は天竜川、南は遠州灘、北は山の間を流れる溪流があり、釣りをするにはもってこいの環境です。その、「浜松」という土地柄にはこだわっています。「浜松」発でグローバルに発信していけるようになりたいですね。現在、約20カ国に輸出していますが、もっと広げていきたいと考えています。

日本のものづくりはコストだけではなく、日本で作っているからこそその魂があると思います。だからこそ、これからも、「メイド・イン・浜松」にこだわっていきたいと思います。



メガバス社製作のウェア